



愛知淑徳大学

ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES

Newsletter

第26号

URL=<http://www2.aasa.ac.jp/org/igws/index.html>

発行年月日：2008年10月15日
〒480-1197 愛知県愛知郡長久手町長湫片平9
Phone 0561-62-4111 EX 2498
FAX 0561-63-9308
E-mail : igws@asu.aasa.ac.jp

IGWS 第26号ニュースレターの目次

- 連続講座『心理学とジェンダー』報告 1
 - 第1回 脳の働きからみた男と女 1
 - 第2回 社会性の発達と性差—なぜ女の子は人形が好きで、男の子はミニカーが好きなのか ... 2
 - 第3回 思春期と青年期における自己同一性とジェンダーをめぐる葛藤と成長 2
- 連続講座『心理学とジェンダー』を聴講して 3
- 連続講座 学生感想文 4
- 小学校国語科教科書教材に見るジェンダー ～2005年度版教科書を中心に～ 6
- 高齢者医療とジェンダー 7
- 学生活動報告 — “ラストフレンズ” 合評会 / 自然分娩の講演会を聞いて 8
- Donald E. Hall 氏講演会報告 / 次回定例セミナーお知らせ 9
- 2008年度後期ジェンダー関連授業紹介 10

長久手キャンパスにおいて、連続講座『心理学とジェンダー』（6月18日、7月2日、7月16日、全3回）を開催いたしました。以下はその概要です。

連続講座

『心理学とジェンダー』

第1回

6月18日(水)

『脳の働きからみた男と女』

吉崎 一人 さん

(本学コミュニケーション心理学科教授)



認知心理学および脳神経科学の視点から、男性は空間把握能力が優位で、女性は言語能力が優位という性差をめぐる認知能力の研究は活発になされている。さらに長期記憶は記憶対象によって異なるが、大まかには女性の方が良いこと、小さい空間内での配置についての空間能力は女性の方が良いことが究明されてきた。これらの認知能力の性差は“狩猟採集仮説”によって説明でき、長い人間の進化の歴史の中で受け継がれてきたのではないかという進化心理学の知見は誠に興味深いものである。すなわち男性によるもの見方と、女性によるもの見方が違うのは単なる性差では

なく、それぞれの社会的な役割分担において大きな意味を持っていたのであろう。空間能力と言語能力のどちらも必要であろうが、男女のどちらかが優れた能力を持つことで、補い合うことができ人間の進化に大きな役割を果たしてきたかもしれない。因みに、現代人がストレスを受けた状態の時に、「手に汗をかく」という自律神経系の反応は、マンモスなどの外敵に遭遇し、恐怖・不安・緊張したストレス状態になりながらも、武器を握り逃走しやすくなるための太古の昔からの人類の原始的な身体反応がいまだに私たちの身体に残っているからだともいわれている。ところで同じ人間で

も男性の心的回転課題と女性の位置記憶課題の認知能力において優位差がみられることが、世界的な調査研究で明らかになりつつある。したがって男女の性的役割が時代とともに変化していくと、何万年何億年という時間が経ったとき、人類に共通する性差による認知能力の変化と成長の可能性を想像できよう。

(文責 IGWS運営委員 米倉五郎)



第2回

7月2日(水)

『社会性の発達と性差—なぜ女の子は人形が好きで、男の子はミニカーが好きなのか』

郷式 徹さん

(静岡大学教育学部准教授)



サブタイトルの“なぜ女の子は人形が好きで、男の子はミニカーが好きなのか”から、従来から言われているように女性は文系で言語能力が高く、男性は理系で空間把握能力が高いというイメージが連想された。しかし幼児期における文化・社会的な観点から、性差についての発達研究が意外にも少ない理由は、バロン・コーエンが提唱する心の理論の誤信念課題（サリーとアン課題）による結果が示唆している。すなわちこの誤信念課題を3歳前後に施行すると女子が男子より高い能力を示すが、4歳半では男女の性差による認知能力の差はなくなる。多くの自閉症児（者）はこの誤信念課題の達成に困難を示し、しかも自閉症の発生率は男子が女子の10倍である。空間把握能力と社会性の能力について、男女の性差はどのような関連性があるのか。自閉症傾向の人は空間把握能力が高いが他者の心を共感理解する社会性が低い。空間把握の能力と社会性の能力は反比例する関係にあり、いわゆる男性型の脳と女性型の脳が想定できることは興味深い。男性型の脳は空間把握力やシステム能力に優れ、周囲の人たちから影響されにくい場独立型であり、女性型の

脳は社会性の能力に優れ、周囲の人との協調性と共感性が高い場依存型である。とりわけ心理テストである埋没図形テスト、共感指数(EQ)、システム化指数(SQ)などの質問紙法により、こうした男性型と女性型の脳の双方を自己評価し、自分のタイプについて内省を深められるのは有意義である。さらに自分とはタイプが異なる他者への理解と共感も深められる。今後、学生たちが職業選択や円滑な人間関係を築く上でとても参考になろう。

(文責 IGWS運営委員 米倉五郎)



第3回

7月16日(水)

『思春期と青年期における自己同一性とジェンダーをめぐる葛藤と成長』

米倉 五郎さん

(本学コミュニケーション心理学科教授)



今回の連続講座は、斎藤和志先生と筆者（本学コミュニケーション学部心理学科）がコーディネーター

となって、「心理学とジェンダー」をタイトルにして、認知心理学（吉崎一人先生）、発達心理学（郷式徹先

生)、臨床心理学(筆者)という3つの心理学領域から、性差やジェンダーがどのように関連し研究されているのかを分かりやすく連続に講演していこうと企画された。第3回目の本講座では、筆者自身が当日の講演者だったため、まず出席者の方々提出いただいた数多くの感想文の中から三つの感想文をご紹介します。①「自己同一性の形成過程における葛藤によって、引きこもりや摂食障害が引き起こされるというお話を聞いて、青年期にとって自己同一性の確立は重要な課題であると感じた」、②「引きこもりも摂食障害も自我同一性と性同一性の拡散や葛藤を乗り越えようとしている“対処行動”なのだということもよくわかった」、③「“性同一性の葛藤”と“性同一性障害”は同じものだと思っていたけど、今回のお話を聞いて、その違いを理解できた」等々。当日の講演で筆者は病院臨床、中学校でのスクールカウンセラー、大学・大学院での学生相談などの心理臨床経験をふまえて、思春期と青年期の男女のクライアントたちの性的同一性と自我同一性の葛藤と成長について説明した。翻って考えてみると、自分のこころとからだを完全かつ万能的にコン

トロールしようとして様々な心身症に陥っている現代人の姿は、人間が地球を万能的に支配しようとして自然環境のバランスを破壊し地球の温暖化を招いている現代の社会的問題とも通低していると思われる。ともあれ、これから未来の社会を担っていく若い学生たちにとり、男女の新しいジェンダー(性的役割)と自我同一性の模索と研究は焦眉の課題となろう。今回の連続講座が「違いを共に生きる」ための指針を探求する先鋒となることを期待したい。

(文責 IGWS運営委員 米倉五郎)



連続講座

『心理学とジェンダー』を聴講して

小久保潤子

今回の講座では、臨床でカウンセリングをしておられる米倉先生のお話によって、実践の場での患者—治療者の関係や実際にどのような治療がなされているのかの一端を知ることができた。特に印象に残ったのは、摂食障害になる(女性)患者が女性らしい振る舞いや身なりなどを拒否する(男性に同化しようとする)傾向にあること、つまり自分のジェンダーに強い違和感を持っているということ(性同一性障害とは違うがそれに類する心理があること)、である。そして治療が進むにつれ、おしゃれに対する関心が高まり、「女らしい」服を身につけ、化粧をするという患者の症例が紹介された。

これをわかりやすい図式に置き換えると、摂食障害の発症と治癒は以下ようになる。既成のジェンダー(「女らしさ」)に対する葛藤・違和感→治療(「女らしさ」を受け入れられるよう意識改革)→治癒(「女らしさ」の受容)

摂食障害とは社会で当然とされるジェンダー・ロールの矛盾の体現、あるいは表現手段であると考えられる。しかし生きていく以上、身体性から逃れることはできない。ここにこの症状の真の深刻さがある。見ら

れる対象としての「女性」の身体から逸脱するため、肉体性を最低限まで捨象することは必然的に死に結びつく。医学的観点から見れば、このような状態に陥った「患者」をみすみす放っておくことはできないであろう。しかしながら今回の講座での症例や治療の実践を聞いてみると、医学的治療には既成の「女らしさ」を受け入れさせること、治癒とは既成の「女らしさ」に矛盾や抵抗を感じさせなくし、それを喜んで実践させる(順応させる)危険性が含まれているように思われた。

身体をもって生きていかななくてはならない以上、身体性を受け入れられるよう心理状態をケアすることはぜひとも必要だ。ストレスや葛藤を減らし、実社会で生きていきやすいような心理状態へとカウンセリングを行ない、それによって身体の健康を回復するのは一つの手段かもしれない。しかし身体性回復のためには既成の「女らしさ」を受け入れることが避けて通れないのだろうか? 身体性を受け入れながら既成のジェンダーの枠組みをゆるがせる身体という別の可能性はないのだろうか? そのようなケアの仕方を模索していくことを期待したい。(本学文学部 講師)

連続講座 学生感想文

第1回

『脳の働きからみた男と女』

畑下 友香

今回の吉崎一人先生によるご講演は「脳の働きからみた男と女」というタイトルで行われました。「脳」という言葉を聞くと、難しい内容なのではないかという自分勝手な苦手意識が働く私でも興味を持つ程、分かりやすいお話しをして下さいました。

私がタイトルを見て最初に浮かんだことは「男性の方が地図を読むのが上手く、女性の方が話すのが上手いということが一般的に言われているが、そのことを説明する脳の働きとは何なのだろうか」という事でした。今回の講演は、私の疑問にまさしく応えて頂けたように感じます。

講演によると、一般的に空間能力は女性よりも男性の方が優位であり、言語能力は男性よりも女性の方が優位であるということでした。ただし空間能力の中で1つだけ例外があり、比較的小さな空間の物体の位置については、男性よりも女性の方が優位であるということでした。この事に関連して講演中には、実際に言語流暢性検査と心的回転課題を行いました。脳の右半球と左半球に働きの上で違いがあることを今日の心理学では、ラテラルリティがあるというふうに呼んでおり、このパターンの性差が認知機能の性差と関連している

のではないかとされています。女性のラテラルリティは男性ほど顕著ではないことが取りあげられ、そこから予測できる事として両半球を使うことで言語機能の優位性をもたらしたこと・右半球で言語能力と空間能力を担当することが空間能力の低下をまねいたことの2点が挙げられました。ホルモンの認知への影響については、性ホルモンが左右半球に対して影響していること・女性ホルモンが空間能力、右半球機能を抑制することの2点が挙げられました。

なぜ認知機能に男女で違いがあるのでしょうか。講演では以下の3点、進化によるもの・環境に適応できるための特性が残ること・子孫を残すための労働の役割分担が挙げられました。これからの社会には、世代・性・国籍などの「違いを共に生きる」道を探っていくことが必要となります。今回の講演でも、脳の働きから男女の「違い」をみていくことは、男女の「同じ」ことも分かるという視点の必要性を話されていました。貴重なご講演を頂いた吉崎一人先生に心より感謝申し上げます。

(本学心理学研究科1年)

第2回

『社会性の発達と性差 ―なぜ女の子は人形が好きで男の子はミニカーが好きなのか―』

村上 仁美

女の子は人形が好きで男の子はミニカーが好き、そういうものだと思ってあまり考えたことがなかったが、一体なぜだろう。サブタイトルを目の前にして、同じようなことを思った方も少なくないのではないだろうか。この講義では誤信念課題、心の理論と自閉症、

埋没図形テスト、共感指数(EQ)、システム化指数(SQ)などを通して男女の性差を考え、最終的には「自分のことを知る」ということを中心に考えていく機会となった。

驚いたことに、幼児期で性差を扱うことはあまりな

いという。発達の性差を扱わない理由は「そのうちなくなるだろう」という考えが、研究者のなかにあるからで、誤信念課題でも3歳前半ではあった差が、4歳半にはほとんど差がなくなるという結果が出ている。しかし、文化的性差の観点から言うと、女性は文系、男性は理系という考えが一般的である。実際、共感指数（EQ）、システム化指数（SQ）の結果から考えても女性型の脳は共感する傾向が優位で、男性型の脳はシステムを理解し構築する傾向が優位である。（生物学的な女性＝女性型の脳ではない）このような差異はどのようにして生まれたか。それは、社会の構造が基本的に一夫多妻制で、強いオスが多くのメスを手に入れ、より多くの子孫を残すために強さが必要であったという歴史がある。強さとは物事がどのように機能しているのか、どのような規則にしたがってシステムが動いているのかを理解することでもあり、そのような強さにとって共感性は邪魔になる。結果、男性型の

脳は女性をベースにしながらもシステム化することになった。

現代は、力（暴力）による支配の時代ではない。さまざまな人がいて、いろんな出会いがある。コミュニケーションをうまくとるには、相手の考えを推測する能力をもつと同時に自分の言いたいことも上手に伝えていく言語的な能力も必要である。自分を知ることによって自分とは異なる特性をもつ他者への理解を深めることができる。また、働き生きていくことから考えると、現代は実に多くの職業があり、その一つ一つが高度化している。自分のタイプを知り、適応していくことが必要になってくる。自分を知ることによって、自分にあった職業を選択しやすくなる。私たちは社会的性差を考えると同時に自分自身についても考え、理解を深めていくことが必要である。

（本学心理学研究科1年）

第3回

『思春期と青年期における自己同一性とジェンダーをめぐる葛藤と成長』

伊東知江子

講演の中では、実際に殴り書き法やバウムテストなどの心理査定テストを行ったり、症状の紹介を実際の事例のようにしてその経過や予後の紹介がされ、とても興味深く聞くことが出来ました。ジェンダーの視点から考えるということで、男性と女性の違いがはっきりしはじめる思春期の危機についてお話を伺い、あまり男女の差からくる心の成長について考えることがなかったのですが、女性・男性という面から考えていくと男性には男性の父性の獲得があり、女性には女性の母性の獲得をすることが大切であるということを変更して考えさせられた。成長していく中で人は様々な危機に直面し、対処していくことで成長することができるのだが、それが出来ないことでどのようなことが起こってくるのか分かりやすく説明していただいた。後半の題材となった青年期女性の自己同一性と性同一性との葛藤と成長—摂食障害をめぐる—という題材は

最近よく耳にする摂食障害をあげていることから特に興味を持った。摂食障害は自我同一性の拡散による不安と内的な空虚感を紛らわすための行動であり、自分を模索しようとする対処行動である。摂食障害の根本にあるものを成長の中にある危機から考えていくことは、これまで自分があまり考えてこなかったことであるが、新しい発見でもあった。摂食障害は心とからだ・行動とが乖離している状態と考え、心理士として関わっていくときの心構えなどを話され、とても勉強になった。心理学を学んでなくても最近よく耳にするようになった摂食障害や引きこもりなどを、心理学的な視点から解明していくことは非常に興味深く、心理学を学んでいない人でも実際に体験しながら、ジェンダーという視点を交えることで分かりやすく、興味深い講演だったのでないだろうか。

（本学心理学研究科1年）



小学校国語科教科書教材に見るジェンダー ～2005年度版教科書を中心に～

中嶋 真弓

1 入学当初の国語科教科書教材とジェンダー

小学校低学年国語科授業時数は、新学習指導要領では、1年生 306(9) 2年生 315(9)である。()内は週当たりのコマ数である。新学習指導要領で、授業時数増加となった算数・理科と比べても倍以上の時数がある。つまり、授業時数だけでも、国語科が「隠れたカリキュラム」の影響を受けやすいことが分かる。また、「教科書教材として採録された文学作品とジェンダー」の関係では、「どろんこまつり」「赤い実」など議論となったことはよく知られている。根岸泰子はその関係について「『文学』性が人権理念に優先することへの明確な説明責任を、文学教育は今後求められることになるだろう」(*1)と述べている。

入学して間もない子ども達は、国語科教科書(発行社は5社)の中に次のような状況を見ることとなる。

●「読み聞かせ」の場面：5社中4社が教師を女性に設定。聞いている児童の姿勢で、1社ではあるが女子4人中2名が正座。全体的に男子よりお行儀がよい。

●口形、書く姿勢指導の場面：口形を説明する写真として5社ともが女子を採用。書く姿勢を提示する写真や絵には、5社中3社が女子を採用。

付記するが、「あいさつ」の指導場面では、お母さんが朝玄関で見送る、日中出会う人は近所のおばさん、夕方はおじさんというような絵も見られる。

これらのことから、「女らしく」あるいは、「女の子は几帳面・字が上手」等の既成概念や先入観があり、また、小学校低学年の担任は女性教師が多いというイメージがあると考えられる。さらに、女性は家庭、男性は仕事という意識が根強くあることを伺い知ることができる。そして、これらの内容や事柄を低学年のうちから自然に子ども達は、当然のこととして受け入れるのである。

2 国語科教科書教材「短歌と俳句」とジェンダー

2011年度新学習指導要領の全面実施となるが、小学校国語科では「古典教育の充実」が打ち出されている。その中で、高学年の「短歌と俳句」が、中学年で指導されることとなった。これらの学習内容の移行により、指導の在り方を明確にしていく必要がある。そこで現行の「短歌と俳句」の採録状況をジェンダーの視点で見直し、今後の指導を考えていきたい。

〈配列：短歌・俳句の提示順と解説の有無〉

記号は以下の内容を示す。○男性作品 □女性作品

●男性作品で解説付き ■女性作品で解説付き

〔東京書籍〔東書〕〕

短歌：●○□○○□ 俳句：●○○○□□

〔大阪書籍〔大書〕〕

短歌：●●●○○□□ 俳句：●●●○○□□

〔学校図書〔学図〕〕

短歌：■●□□ 俳句：●●○

〔教育出版〔教出〕〕

短歌：●○○○○○○□ 俳句：●○○□○○○○○

〔光村図書〔光村〕〕

短歌：●●□○○○ 俳句：●●□○○○

配列を見てみると、女性作品が後半に見られることが多い。また、解説が付いている作品では、〔学校図書〕冒頭持統天皇の作品以外は全て男性作品である。

〈短歌・俳句採録の女性作品の割合〉

〔上段採録数(女性作品数) 下段女性作品採録割合〕

ジャンル	東書	大書	学図	教出	光村	全体
短歌	6(2) 33%	7(2) 29%	4(3) 75%	8(1) 13%	6(1) 17%	31(9) 29%
俳句	6(2) 33%	7(1) 14%	3(0) 0%	9(1) 11%	6(1) 17%	31(5) 16%

この表から、女性作品の採録がいかにかに少ないかが分かる。歴史的に女性作品の少ないことは理解できるものの、学校教育におけるジェンダーの視点から見ていくとき偏りがあることは否めない。作品採録数が少ない上、解説も付いていない。解説付きの(ほとんどが男性)作品で短歌や俳句を理解させた後、採録された作品を調べたり音読させたりしている現状の指導方法から見ていくと、女性作品に接する機会を狭めることは明らかである。金井景子は、国語教科がジェンダー・フリーのためにできることとして「時代を切り開いてきた作家・作品をジェンダーの視点から読み返すこと。時代に活躍する表現者からジェンダーについてのさまざまなヒントをもらうこと」(*2)と述べている。学校現場では、女性作品への学習を充実させるためにも、教師が意図的に採録されている女性作品を取り上げたり、その作家の他の作品を読ませたりしていくことが重要である。そして、作者のものの方や考え方、感じ方について考えさせ、学ばせていくことが大切だと考える。それが、ひいては、国語科のキーワードである互いの立場や考えを尊重して言葉で「伝え合う能力」の育成につながる一歩だと考えるからである。

【註】*1 根岸泰子「ジェンダー・フリー教育の理念と、その国語教育への導入」(『岐阜大学教育学部研究報告人文科学第51巻第1号』)2002. p.239.

*2 金井景子『ジェンダー・フリー教材の試み 国語にできること』学文社 2001・3・31 p.189.

(本学文学部教育学科 准教授)

高齢者医療とジェンダー

栗田 麻結

社会人10年目を迎えている同級生が多い中、この春から私は理学療法士として再出発を始めています。理学療法士とは、1965（昭和40）年に定められた国家資格であり、厚生省（現厚生労働省）から免許を受け、医師の指示のもと理学療法を行う者のことをいいます。理学療法とは、病院の患者さんや老人保健施設の利用者さんが、起き上がる、立ち上がる、歩く、といった生活をするための基本的な動作を再び獲得するためのリハビリテーション（以下；リハビリ）のことをさします。貴校ではジェンダー・NGOの勉強をしており、全く無縁だった医療の世界に飛び込むきっかけとなったのは、大学院卒業後の経験でした。

大学院卒業後、私はNPO法人に就職し、タイのしょうがい児のために、現地で車椅子を製造し贈るといった仕事をしていました。そのとき、現地で車椅子を必要とするしょうがい児がいるかどうか調査をする機会を得ました。タイのNGOの方、自治体の方とともに、現地の家々をまわりしょうがい児に接しているうちに、当然のことですが、「私にはこの子どもに車椅子が必要なのか、必要でないのかを判断する知識がない」ことを痛烈に感じるようになりました。ポリオや水頭症により家から外に出られない子どもがほとんどでしたが、果たして本当に車椅子が必要なのか、杖や装具などがあれば歩けるのか、車椅子があっても外に出られないのなら車椅子そのものが必要なのではないか、を判断できない自分が調査することなどできない、子どもに申し訳ないと思いました。何の専門知識も持たないまま国際協力活動をしている気になっている自分を恥ずかしいと思いました。その調査の終わりに、タイのとあるリハビリセンター（と記憶しています）を尋ねる機会を得ましたが、そこは建物だけで利用されておらず、療法士も私たちが訪ねてから3名が施設に入ってきて近所のしょうがい児と歩行練習のデモを見せてくれただけでした。この見学の帰りに、現地のNGOスタッフから「しょうがい児には理学療法（Physical therapy）が必要だ」といわれ、始めて理学療法のことを知りました。そして、タイでは理学療法をはじめリハビリという分野がまだまだ未成熟であることを知りました。この調査の後、今の自分の専門知識のなさでは仕事は続けられないと思い、私は仕事を辞めることにしました。そして、タイでのリハビリの未成熟さ、日本のリハビリも高齢社会において今後益々必要になると思い、理学療法士の資格を取る決意をして専門学校に入り、この4月に無事資格を取得することができました。

さて、現在私が働いているのは、脳卒中で倒れた高齢者の多い病院です。脳卒中になると、身体の半身の自由が奪われ、今までできていた起き上がり、立ち上がり、歩く、といったことが困難となり、寝たきりになってしまう危険があります。半身が不自由となっても寝たきりを防いで、少しでも自分の力で立ち、歩くといった動作をもう一度獲得できるよう、私はその方たちと一緒に毎日リハビリを行っています。

しかし、周知の事実ですが日本の高齢者を取り巻く医療制度には問題が山積みです。今年度から始まった後期高齢者医療制度により医療負担が増え十分な医療行為を受けられない高齢者。また、長期に渡って療養が必要とされる方のための療養型病床の廃止が2011年に決まっていますが、廃止に伴い病院から行き場を失った患者さんを受け入れる制度が未整備なままであり、患者さんがベッド難民となるのではないかと危惧されています。その上、リハビリを受けられる日数には制限があり、しょうがいを抱えた高齢者にとっては、制度に守られるどころか、しょうがいに加えて制度によって、より生きにくい社会にされているのが現状です。

そして、しょうがいを抱えた高齢者の方を取り巻く環境には、根強いジェンダー意識があります。自宅に帰った後や施設に入所された後、介護に携わるのは家族、介護職員の方ですが、その従事者は圧倒的に女性です。家族に関しては私の少ない経験上で感じたことですが、妻、娘、息子の嫁といった女性が多く、そのために仕事を辞める方もみえます。介護職員に関しては約8割が女性との報告があります。ご本人が望んで介護を行う、介護職を選択することもありますが、その理由として「女性だから家族の介護をしなければいけない」「女性だから心遣いができ、介護に向いている」といった根拠のないステレオタイプな言葉が、介護を受ける高齢者にも、提供する側からも聞かれることがあります。しかし、特に家族の介護には休みはなく、お互いにストレスを引き起こし、精神的な病に陥ったり、DVといった問題に発展することがあります。

最後に、脳卒中で倒れた方は、歩けるようになっても杖をつき足に装具を付ける場合があります。皆さんは、そのような人が街で歩いているのを、中高年の方なら職場に復帰している姿を、どれだけご覧になったことがあるでしょうか。自宅に退院できても、その後自由に街を歩き、職場復帰できる例は少ないといえます。そこには、社会復帰に向けた制度や道路の未整備、世間の人々がしょうがいにしやむける偏見、という問題もありますが、私たち理学療法士が適切なりハビリを提供できていない、という問題もあると思います。

新人理学療法士として脳卒中の方の社会復帰を目指して専門知識と技術を習得していくとともに、一医療従事者として、またジェンダーの視点で医療現場に問題を投げかけていきたいと思っています。

* 「しょうがい」の表記について

「障害」に使用される「害」という字が、「公害」「害悪」というイメージを与えるという理由から、現在ではこの字の使用を控える自治体もある。その意に準拠し本稿では「しょうがい」と表記する。

（本学コミュニケーション研究科博士前期課程修了
理学療法士）

“ラストフレンズ” 合評会

橋本 菜央

6月に、フジテレビのドラマ『ラストフレンズ』の合評会を行いました。

『ラストフレンズ』とは、宗佑(加害者)と美智留(被害者)のカップル間のデートDVを描いたドラマです。デートDVとは、恋人間において加害者が被害者にふるう暴力のことです。このドラマの最後で、宗佑は自殺し、美智留は宗佑の子供を産み、シェアハウスの仲間たちといっしょに子供を育てることを決意します。

合評会では、参加者全員が思ったことを率直に話し合いました。美智留が子供を育てることについては、「産むことを決意して良かった」という意見もあれば、「子供を産むというのは、宗佑に思い込まされているからじゃないのか? 子供を産んだからといって、すべての母親が強くなれるとは限らない。それは個人の資質によると思う。今の状態でちゃんと子供を育て切れるのかどうか、美智留はよく考えるべきだ」「子供は産まないほうが良かったのでは? もし男の子だったら、成長して宗佑に近い歳になったとき、美智留は戸惑わずにいられるのか疑問だ」という意見もありました。

また、「もし恋人に携帯電話を見られるなど自分のプライバシーを侵害されたらどう思うか」という問いに対しては、「たぶん断れない。悪気があってやっている

のではないと思うから、『いやだ』というのはかなり勇気がある」という意見もあれば、「相手のプライベートなことまで把握したがるのは愛ではない」「表面的には不快感を表さないが、心の中では拒絶する」という意見などがありました。

デートDVは実際にはむずかしい問題を含んでいます。今回さまざまな意見が活発に交わされ、交際における有意義なヒントになった点もいくつかありました。

(本学ビジネス学部2年)



自然分娩の講演会を聞いて

吉田 篤史

先日、私は岐阜にて、自然分娩に関する講演を聞く機会がありました。その医院では出産するまで医者が赤ん坊の性を告げることは決めてないそうです。性を知らせない理由は、親が生まれてくる子が男であるか女であるかによって気持ちが左右され、特に出産する母親に影響が出てしまうからだそうです。

このような影響が出てしまう背景には、両親のジェンダー観が影響しているのではないのかと思いました。無事に生まれてきてくれるのであれば、男であろうと女であろうと関係なく喜ばしいことであるはずですが、それにも関わらず、最初の子は男の子がいいとか、女の子は育てやすいからなどと両親の持っているジェンダー観が先行してしまっているように考えられます。

それ以外にも、講演を聞いて驚いたことがありまし

た。それは通常の分娩とは異なり、この医院で行なう自然分娩の場合、痛みをあまり伴わず、心地よい分娩が可能であるということです。私が抱いていたお産のイメージは、とても痛くつらいものでした。しかし、講演者の話では、「自然分娩をした人はほとんどの人がもう1回産みたいと言う」ということでした。何よりも妊娠をしている方がとてもいきいきとした生活ができ、分娩後もいきいきとした生活を送られた方が多いとのことでした。その理由として、自然分娩ではとにかく運動をさせるそうです。ベッドでずっと横になっている生活と違い、ストレスを溜めることなく楽しく生活ができるからだそうです。

私は今回の講演会を通じ、親の自分らしさこそが自然分娩の魅力であり、通常の分娩との違いであると感じました。
(本学ビジネス学部2年)

Donald E. Hall氏講演会

6月27日(金)17:00~18:00

**“Travel Abroad and Expanded Understanding:
James Baldwin’s Loveless American in Paris”**

このたび、愛知淑徳大学の語学研修提携校の一つウェスト・ヴァージニア大学から、英文学部の主任教授のドナルド・ホール氏が来学され、当研究所にて講演をされた。ホール氏はヴィクトリア朝文学、ジェンダー理論、クィア批評と幅広く研究されている。今回、“Travel Abroad and Expanded Understanding: James Baldwin’s Loveless American in Paris” と題した講演では、アメリカ作家ジェームズ・ボールドウィン作『ジョヴァンニの部屋』について話された。

ホール氏は、修士号修得後、平和部隊のメンバーとなってルワンダ大学で生活したご自身の体験から講演を始められた。海外での、しかも全く別世界での生活ではこれまでの常識は通用せず、本で得た知識も機能せず、それこそ認識を超越した体験をするものである。ホール氏は、こうした自らの体験を、テキストの多義的な解釈を認めたハンス＝ゲオルグ・ガダマーの「地平の融合」から説明した。ガダマーは哲学的解釈学の創始者である。解釈をしている対象の背後の人間と関わること、他人の言葉に耳を傾け、彼らの異なった見方から学び、それによって広がったヴィジョンを持つようになった自己に戻る—このように、他者と対話的な関わりをすることで、人生というテキストの認識論的な「地平」を広げていくことができるのである。

ホール氏は、旅による人生の「超越」の問題を、『ジョヴァンニの部屋』のデイヴィッドを例にして展開していった。もっとも「超越」に失敗した例としてはあるが。主人公のデイヴィットは男に欲望する自分の性

的アイデンティティに苦悩し、アメリカを逃げ出し、パリに向かった。しかしそこでも自分を解放することはできなかった。彼は自分の自己概念という鏡にとらわれてしまい、愛するジョヴァンニだけでなく、フィアンセや自分自身の人生をも破壊してしまうのである。

ホール氏は、自己を超越できるものは他者を通してしかできないとするボールドウィンとガダマーの考えを紹介し、他者を受け入れる倫理的選択が必要だと話された。文学上のさまざまな理論的研究も自らの世界観に閉塞せず、その世界観の神聖さを壊すこと、そして人生においても、居心地のよい同種のものが集う世界から外に出て、差異ある世界のものを受け入れていくことが必要なのである。文学テキストにとどまらず、人生という自己のテキストを開かれたものにする考えさせられた講演だった。

(文責 IGWS 運営委員 平林美都子)

**第20回定例セミナーお知らせ****恋愛と暴力 — デートDVにおける力と支配の関係**

DV (ドメスティック・バイオレンス) は、親密な関係の相手に対して振るわれる、身体や心への暴力のことです。若者の間でも、はじめはなかった暴力が、親密な関係になるとともに身体的・精神的・性的暴力など、さまざまなかたちで広く起こっている現状があります。それを「デートDV」と呼びます。身近な恋愛における人間関係を見直し、暴力的に脅されない、お互いに対等で尊重しあえる関係について考えます。

講師：具 ゆり さん
(アウェア認定ファシリテーター)
日時&場所：10月30日(木) 13:20~14:50
愛知淑徳大学星が丘キャンパス
1号館3階13C教室

参加無料でどなたでも聴講できます。

〈2008年度後期〉 21世紀の今、ASUのジェンダー論、女性学・男性学がさらに面白い!! (一般の人も受講できます)

愛知淑徳大学、ジェンダー・女性学関連の授業

ビジネスと社会 長久手
講師/國信潤子・原山恵子

【授業の概要】

社会学的統計データを使って産業社会学的手法により、男女共同参画などの領域でビジネス、労働環境におけるジェンダー関係を考察する。また法制面でのビジネス、労働環境の変容、特にビジネス・労働・家庭生活の両立におけるジェンダー関係の考察を行う。

ビジネスとジェンダーⅡ 長久手
講師/原山恵子

【授業の概要】

男女雇用機会均等法の問題点、間接差別、不安定雇用の問題点、育児休業における男性の取得が低い原因、職業と家庭の両立を阻むものに言及し、産業界における人間関係についてジェンダーに敏感な視点から考察する。男女賃金格差、セクハラ事件などについても詳細に検討する。

産業社会学概論(ジェンダー) 長久手
講師/國信潤子

【授業の概要】

産業社会学と開発社会学の2領域の接点についてジェンダーに敏感な視点から考察する。まず日本国内のビジネス・労働界のジェンダー関係を概観し、国境を越えた移住労働者の実態を検討する。さらに異文化間における開発協力関係を形成する上で必要となる異文化理解についても考察する。

比較文化 長久手
講師/星山幸子

【授業の概要】

この授業では、文化を考察する上で必要な概念について学ぶことによって種々の文化の特徴について考える。その際に民族、国家、南北問題、ジェンダーなど様々な視点から考える。特にイスラーム文化の事例も取り上げる。

ジェンダー論 長久手
講師/石田好江・藤井麻湖・小川明子

【授業の概要】

ジェンダー(gender)という言葉は、おおよそ「社会的・文化的に形成された性」「社会的規範としての性役割」といった意味で用いられている。ジェンダーという概念を使用することは、単に「性別の捉え方」の問題(生物学的な性別への異議申し立て)にとどまらず、現代社会及びその知の多岐にわたる多様性を認識し、これまでとは違った新しい問題を発見することを可能にする。その意味ではジェンダーは、現代社会の現実をよりよく認識するための道具であるといえる。本講義では、メディア・コミュニケーション、文化、社会システムなどをジェンダーという道具を用いて捉えなおすことを目的としている。



ジェンダーと社会 長久手・星が丘
講師/中島美幸

【授業の概要】

文学作品をはじめとする「表現」を取り上げ、「女」「男」がどのように描かれているか、またなぜそのように描かれたのかを、社会的・歴史的・心理学的視点から考える。また「表現」された「女」「男」によって、社会や個人がいかに固定的なイメージに縛られているかを認識し、自由な、現実の多様な女と男の生と性の「表現」を探る。

女性学・男性学 長久手・星が丘
講師/中島美幸

【授業の概要】

男女についての定説化した知識、それによって作り出された役割、人格内部に及ぶ性別化の影響とその結果生まれる病理などについて様々な事例や理論を紹介し検討する。

女性学・男性学 長久手
講師/中村彰

【授業の概要】

1996年6月に成立した「男女共同参画基本法」をめざす社会システムを検証し、仕事の場や家庭、地域で、男女がフェアで対等に生きるとは何かを考える。その際に日本における女性運動、男性運動の歩みにも触れる。また近年の社会問題について男女共同参画の視点で考察する。

これらの講座履修・申し込み先

愛知淑徳大学エクステンションセンター

〒464-8671 名古屋市中種区桜が丘23 TEL/052-783-1665(直通)、FAX/052-783-1621(直通)
受付日時(月～金)9:00～17:00 ホームページアドレス <http://www.aasa.ac.jp>

編集後記

今年度の前半には、最近関心の高い分野でもある「心理学」の領域とジェンダーとの関連について連続講座を開催し、多数の方々の聴講を頂きました。26号では、この模様をご報告しました。また本学の学生らが企画したデートDVに関する活動も掲載いたしました。(高橋 博子)

ASU・IGWS2008年度

運営委員

平林美都子(所長兼)、石田好江、
國信潤子、米倉五郎、若松孝司、
西 和久、佐藤美芳

事務担当

高橋博子